書誌・出版史・書物メディア史のシリーズ ＊文圃文献類従 52＊

戦前期「外地」雑誌・新聞総覧

―朝鮮・満洲・台湾の言論界

近代日本は、アジア・パシフィックの広範な地域をその版図とした。
帝国日本の雑誌・新聞は、列島内で自己完結していたわけではなく、これら地域のメディアと密接に関わりながら生成・展開していた。

本書では日本統治下の朝鮮・満洲・台湾、南洋諸島などで刊行された、新聞・雑誌活字メディア等を案内／解説／解題したものを集成。

収録資料を相互参照することにより「外地」言論界の様態が浮かび上がる。
広く植民地経営の実態を明らかに。

全九巻
［編集復刻版］

監修―井川 充雄（立教大学社会学部教授）
推薦―土屋 礼子（早稲田大学政治経済学術院教授）

金沢文圃閣

監修のことば

「外地」におけるメディアの実態を伝える

井川 充雄
（いかわ みつお／立教大学社会学部教授）

1895（明治 28）年、日清戦争に勝利した日本は、下関条約によって清国より台湾を割譲した。その後、日本は、1905（明治 38）年、日露戦争後のポーツマス条約により、ロシアの租借地であった遼東半島先端部と南満洲鉄道附属地の租借権をロシアから日本に移行させ、「関東州」の植民地経営をおこなった。さらに、1910（明治 43）年には、韓国併合により朝鮮半島を掌中に収め、1920（大正 9）年のヴェルサイユ条約では南洋諸島を「委任統治領」として獲得した。そして、1931（昭和 6）年の満洲事変を経て、翌 32 年 3 月 1 日には「満洲国」の建国に至った。このように、近代日本は、さまざまな手段を通じて次々と「外地」を獲得して、その版図を広げていった。その後も、さらにアジア各地へその領土の拡大を目指した。これは、19 世紀から 20 世紀にかけて、西欧列強が世界各地に広大な植民地を獲得したのに追随する動きであったと言える。

こうした植民地経営にあたっては、同化政策が強力に推し進められた。特に初期においては、武力を背景に強硬な統治政策がとられたのであるが、ある程度、支配が安定化すると、「外地」においても人々に帝国の「臣民」としての観念を涵養する方針に転じていった。また、「内地」からも多数の日本人が外地に移住していった。その数は、朝鮮半島に 70 万人、台湾に 30 万人、「満洲国」を含む海外に 142 万人と言われている。

したがって、植民地経営の中で、メディアの果たす役割は大きかった。それは、「外地」の人々を「臣民化」し、また「外地」に出て行った日本人に対しても、日本国内の情報を伝える必要があったからである。つまり、「帝国のメディア」として、人々を教化する役割が期待されたのである。

他方で、日本の植民地支配に対して批判や抵抗を行う勢力に対しては、つねに目を光らせ、そうしたメディアにはさまざまな弾圧を加えた。

こうした「外地」におけるメディアの実態は、戦後 70 年を過ぎた今日でも、必ずしも明らかになっているとは言えない。本資料集は、日本統治下の台湾、朝鮮、満洲で刊行された新聞・雑誌の活字媒体を総覧したものを集成したものである。それぞれの資料は、編纂の主体も刊行の意図も個々別々であり、統一されたものではない。しかし、これらを相互に参照することによって、日本の「外地」における言論界の様態を概観することが可能である。したがって、本書は、日本の植民地経営の実態を明らかにするための基本資料として、大いに活用されるものと確信している。

推薦のことば

メディア史の大きな空白への貴重なしるべ

土屋 礼子
（つちや れいこ／早稲田大学政治経済学術院教授）

日清戦争後に台湾を植民地として以降の「大日本帝国」下における台湾・樺太・朝鮮・満洲等の外地の新聞雑誌というのは、メディア史の大きな空白である。

この分野については、古くは蛯原八郎『海外邦字新聞雑誌史』（1936）、近年では中下正治『新聞にみる日中関係史』（1996）、李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』（2000）、同『朝鮮における日本人経営新聞の歴史』（2009）などの研究があるが、台湾や樺太、パラオなどの南洋諸島も含めた「外地」で、日本語のみならず中国語やさまざまな言語による新聞雑誌の発行に関わった日本人たちの足跡は、まだ全貌が見渡せるには至っていない。

日本の支配に脅かされたとする立場の人々からすれば、それらは悪しき「日帝」の手先であり、唾棄すべき親日派の傀儡メディアに他ならないだろう。実際に日本の外務省は、その中のいくつかの新聞雑誌に補助金を出したり支援していたのも事実である。

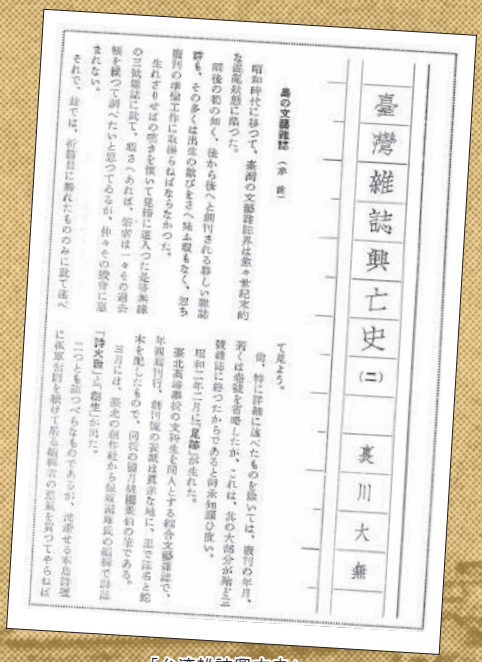
しかし、レッテルを貼ったのみでそれらをうち捨て無視し忘却することは賢明だとは思われない。なぜなら 20 世紀前半において、アジアにおいて最も急速に産業と文明が発達した日本が、欧米と対抗しつつどのように周辺国に影響を及ぼしていったのか、「外地」に移住した日本人たちは何を夢見てどう行動したのか、そして日本人による経済的・政治的・軍事的支配が失敗したとすればその原因は何だったのか、それらを解く鍵がこれらのメディアには示されていると考えられるからである。

現在も続くアジア諸国と日本の間の歴史認識問題を考えるためにも、「外地」において発行された新聞雑誌の全体を明らかにする道筋を照らすこの復刻資料は、貴重なしるべとなるにちがいない。

【第一・二巻】『台湾の言論界』台湾①・②

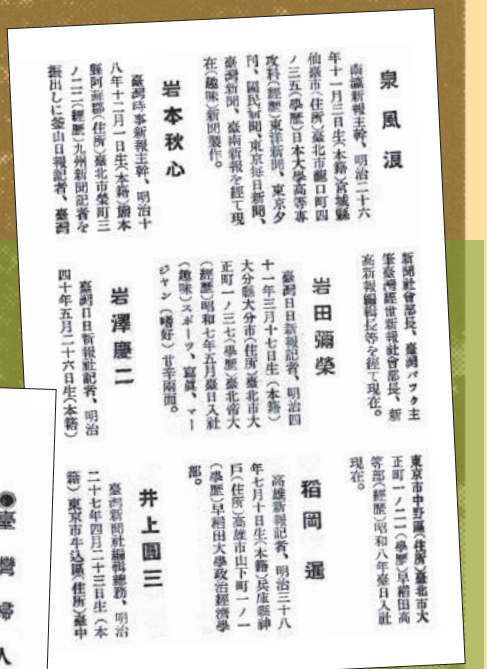
【一巻】346 頁
裏川大無「明治三十年代の台湾雑誌覚え書　一・二」
『愛書』1、2 輯（台湾愛書会、1933 年 6 月、1934 年 8 月）
裏川大無「台湾雑誌興亡史　一～九」
『台湾時報』1935 年 2 ～ 12 月号（台湾総督府内台湾時報発行所、1935 年 2 ～ 7、10 ～ 12 月）
「台湾文芸雑誌興亡史　一～三」
『台湾芸術』1 巻 1 ～ 3 号（台湾芸術社、1940 年 3 ～ 5 月）
池田敏雄・黄得時「台湾に於ける文学書目―文芸雑誌の部」
『愛書』14 輯（台湾愛書会、1941 年 5 月）
『台湾新聞総覧（昭和 11 年版）』（国勢新聞社台湾支社、1936 年）

【二巻】378 頁
『南支南洋ニ於ケル邦人ノ経済的活動状況（熱帯産業調査会調査報告書）』
（台湾総督府警務局保安課、1935 年）

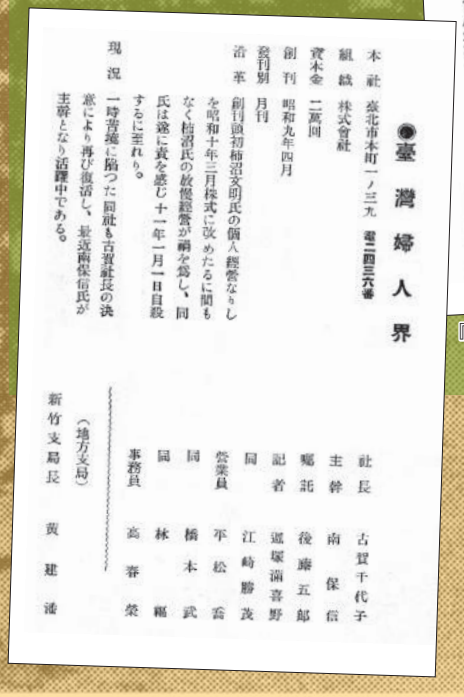


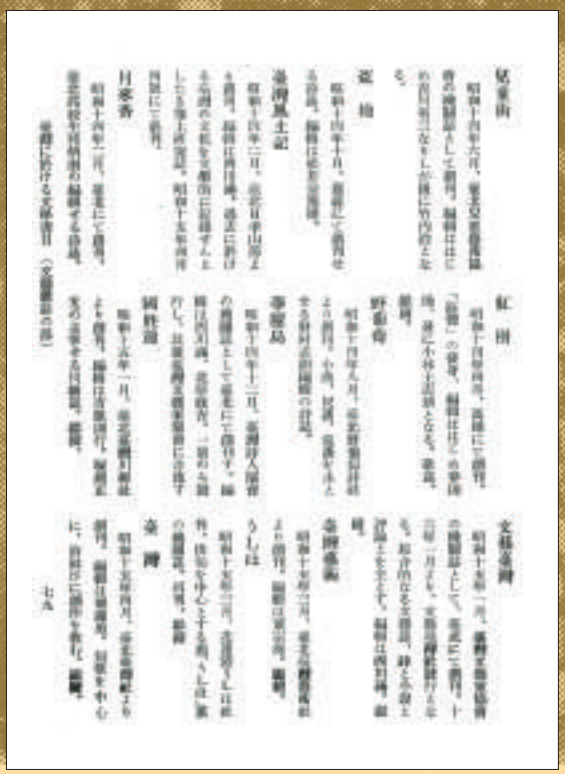
『台湾雑誌興亡史』

内地・東京を中心とする情報ネットワークとは異なる、
旧植民地地域独自の日本語言説の生産・流通・受容のサイクルを考える上で、
今後さらなる発展的な研究に向けた重要な足がかりとなる「総覧」資料集。


泉風浪
岩本秋心
岩田彌榮
岩澤慶二
稲岡暹
井上圓三

『台湾新聞総覧　昭和十一年版』


●臺灣婦人界
本社　臺北市本町一ノ三九　電二四三六番
組織　株式會社
資本金　二萬圓
創刊　昭和九年四月
發刊別　月刊
沿革　創刊頭初柿沼文明氏の個人經營なりしを昭和十年三月株式に改めたるに間もなく柿沼氏の放慢經營が禍を爲し、同氏は遂に責を感じ十一年一月一日自殺するに至れり。
現況　一時苦境に陥つた同社も古賀社長の決意により再び復活し、最近南保信氏が主幹となり活躍中である。
社長　古賀千代子
主幹　南保信
囑託　後藤五郎
記者　遠塚滿喜野
同　江崎勝茂
營業員　平松喬
同　橋本武
同　林福
事務員　高春榮
（地方支局）
新竹支局長　黄建潘


「台湾に於ける文学書目　文藝雑誌の部」

社報新日日灣臺

東日新聞　鴨江日報　釜山日報　湖州日日新聞　湖湘報　裕江新聞　光州日報　木浦新報

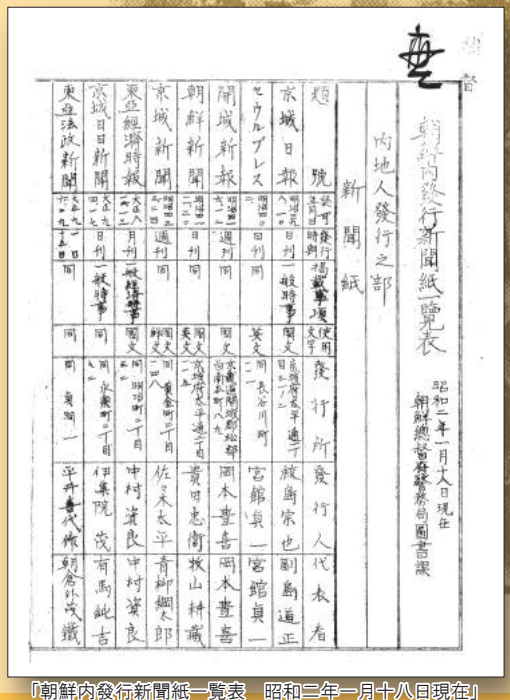
植民地における雑誌

【三巻】266 頁
『満洲に於ける言論機関の現勢（満鉄調査資料第 61 編）』
（南満洲鉄道株式会社庶務部調査課、1926 年）
『朝鮮内発行新聞紙一覧表　昭和二年一月十八日現在』
（朝鮮総督府警務局図書課、1927 年）
『朝鮮内発行新聞紙一覧表　昭和八年十一月末日現在』
（朝鮮総督府警務局、1933 年）
『国（英）文継続発行出版物一覧表　昭和十二年五月十五日現在』
（朝鮮総督府警務局、1937 年）
『朝鮮内発行新聞紙一覧表　昭和十四年八月一日現在』
（朝鮮総督府警務局、1939 年）
『朝鮮内発行新聞紙一覧表』（朝鮮総督府警務局、〔1940 年〕）
『朝鮮内発行新聞紙一覧表　昭和十六年一月十日現在』
（朝鮮総督府警務局、1941 年）
『満洲新聞雑誌総覧　昭和 2 年』（満洲公論社、1927 年）

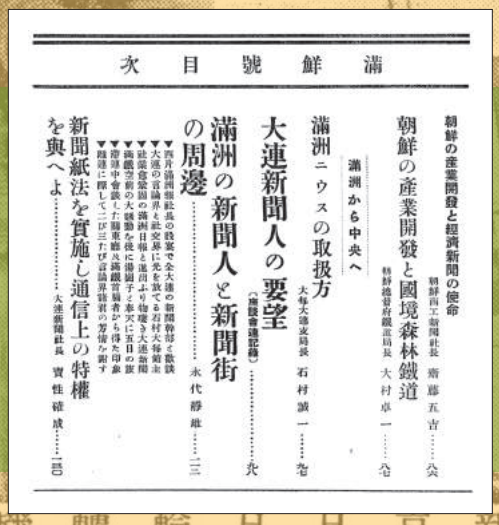
【四巻】386 頁
中村 明星『満洲朝鮮新聞雑誌総覧（昭和 4 年版）』（新聞解放満鮮支社 、1929 年）

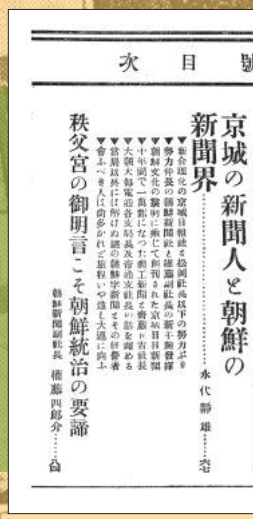
【五巻】430 頁
『新聞及新聞記者』1930 年 9 月満鮮号（新聞及新聞記者社、1930 年 9 月）
『半島の新聞』（新評論社、1931 年）

【六巻】292 頁
中村明星『朝鮮・満洲新聞現勢』（新聞解放満鮮総支社、1937 年）
『満洲の新聞と通信』（満州弘報協会、1940 年）


朝鮮内發行新聞紙一覽表
昭和二年一月十八日現在
朝鮮總督府警務局圖書課
内地人發行之部
新聞紙

「朝鮮内發行新聞紙一覧表　昭和二年一月十八日現在」





宗主国の言語による・新聞メディアとは何だったのか？

『滿洲新聞雜誌総覧　昭和二年』

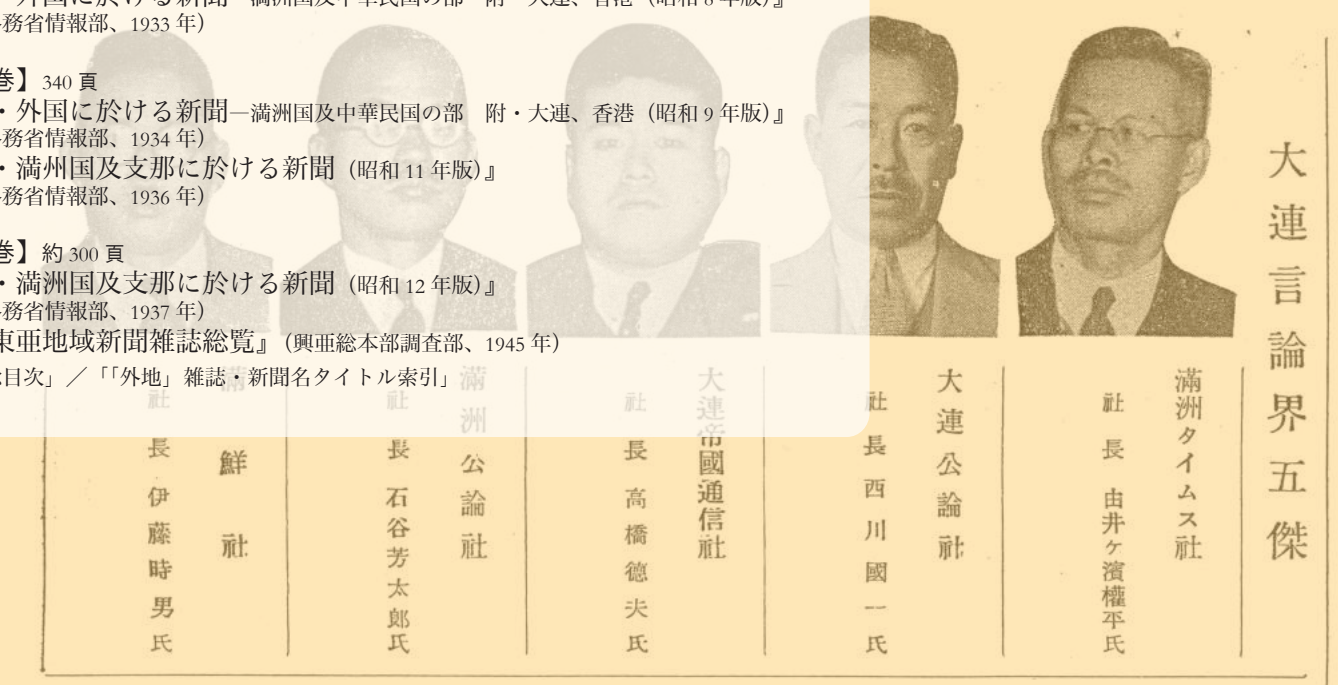
『滿洲朝鮮新聞雜誌総覧—昭和四年版』

『新聞及新聞記者』

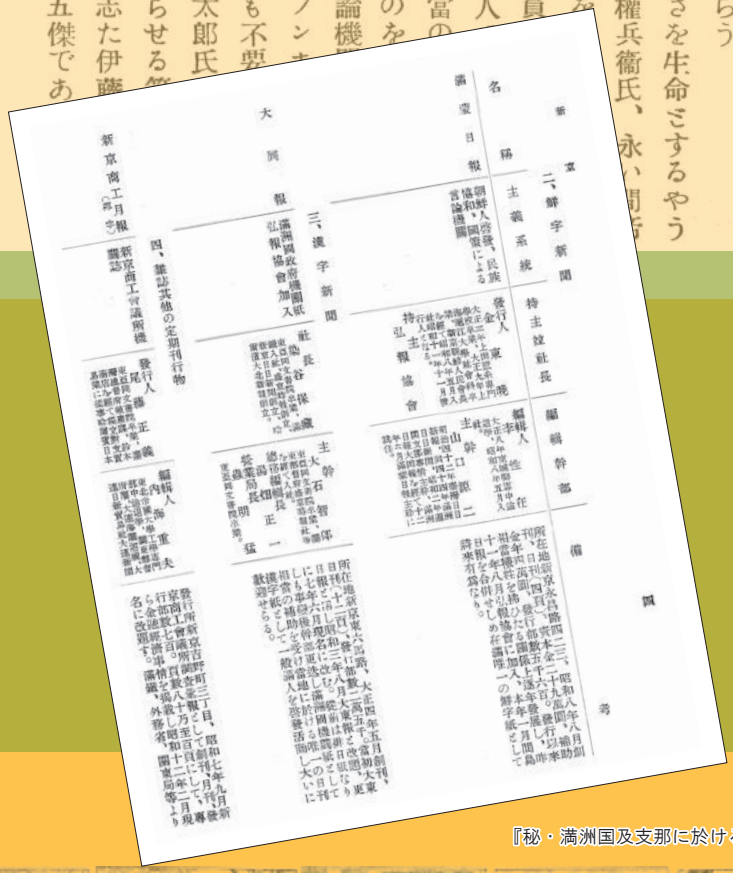
【七巻】286 頁
『秘・外国に於ける新聞―満洲及支那の部　附・大連、香港（昭和 7 年版）』
（外務省情報部、1932 年）
『秘・外国に於ける新聞―満洲国及中華民国の部　附・大連、香港（昭和 8 年版）』
（外務省情報部、1933 年）

【八巻】340 頁
『秘・外国に於ける新聞―満洲国及中華民国の部　附・大連、香港（昭和 9 年版）』
（外務省情報部、1934 年）
『秘・満州国及支那に於ける新聞（昭和 11 年版）』
（外務省情報部、1936 年）

【九巻】約 300 頁
『秘・満洲国及支那に於ける新聞（昭和 12 年版）』
（外務省情報部、1937 年）
『大東亜地域新聞雑誌総覧』（興亜総本部調査部、1945 年）
＊「総目次」／「「外地」雑誌・新聞名タイトル索引」



今回新たに作成した
「「外地」雑誌・新聞名タイトル索引」が
旧植民地地域発行日本語逐次刊行物をめぐる
今後の研究環境整備に効力を発揮。


滿洲國
新京
（昭和十二年八月現在）
概說
人口 本邦人 九九〇七〇（內朝鮮人二二九九 滿洲人 三四二九六四 外國人 九七三）
客年八月株式會社弘報協會の成立を見たる結果、在滿言論機關は之に統制せらるゝことゝなり主なる新聞は該協會に出資加入し、在滿言論の統制其の緒に就きたり。當地に於ける新聞は常に大連內地方面の大新聞に壓せられ、今尙地方新聞の域を脫せざる實情なり。邦字紙は大新京日報、新京日日新聞、滿洲商工日報及滿洲日日新聞新京號外の四紙あり。大新京日報は滿洲日日新聞と姉妹紙たる關係且弘報協會に加入し居る爲近時非常なる躍進振りを見せ、從來新京日日新聞が國都中心主義を採り居たるに對し之と實力相當激甚なる競爭を續け居たるも、近き將來遙かに之を凌駕するに至るべしと思料せらる。
滿洲商工日報は發行人問題に行悩みあり經營狀態も稍不振の感あり。
邊字紙大同報は當地に於ける唯一の邊字紙にして、弘報協會に加入、滿洲國政府機關紙として克く滿人を啓發し一般滿人より非常に歡迎せられ、經營宜しきを得、目下發行部數激增の一途を辿り居れり。
鮮字紙滿蒙日報は全滿唯一の鮮字紙にして、弘報協會に加入、從來の面目を一新し在滿鮮人の啓發指導に當りつゝあり。
雜誌其他の刊行物は相當多數あるも滿洲行政及新京商工月報の外見るべきものなし。
一、邦字新聞

名稱	主義系統	持主竝社長	編輯幹部	備考
大新京日報 な弘報協會加し	社長 村田愈藏 東京帝國大學法科大學卒業後滿鐵勤め	主幹 笠神志都延 大正五年中央大學卒業		所在地新京中央通四四、昭和十年一月創刊、日刊（朝刊八頁夕刊四頁）發行部數一萬九千圓、資本金九萬五千。

「「外地」雑誌・新聞名タイトル索引」（抄）

愛国報
愛書
青白報
赤い支那服
アカネ
旭日報
足跡
亜細亜日報
あぢさい
明日
亜東雑誌
亜東時報
亜熱帯
厦門商報
厦門日報
アルマ
荒地
安徽公報
安徽時報
鞍山日日新聞
鞍山日々新聞
安東経済時報
安東時事新報
安東市報
安東新報
安東取引所月報
安東取引所日報
安東毎日新聞
安東新聞
安平
安奉毎日新聞
月来香
威海日報
一報
色ある風景
ヴエストニック・マンヂュリー
ウエチールネエ・ウレーミヤ
元山毎日新聞
うしほ
麗島
雲南新報
営商日報
益世報
益民時報
エコノミー
チェスキー・ヴエストニック
恵須取毎日新聞
越華報
江西建設日報
エヴレイスカヤ・ジーズニ
延慶民報
遠東時報
延辺晨報
央州日報
樗
桜府日報
大阪朝日「朝鮮朝日」
大阪朝日新聞
大阪朝日新聞号外
大阪毎日「朝鮮毎日」
大阪毎日新聞
大阪毎日新聞号外
大タロコ
大同報
大泊毎日新聞
落合新聞
回帰線
海響
開原実業時報
開原新報
外交評論
戒克船
会報
快報
科学雑誌
華僑日報
楽群週報
鄂西晨報
鄂西中山日報
学術
華言報
華字日報
華声報
華申日報
学校通信
合作月刊
家庭倶楽部
カドラン
加奈陀日日新聞
河南民報
華風報
華報
河北公報
華北新聞
華北新報
華北日報
華北晩報
鴨江日報
華洋日報
樺太西海新報
樺太時事新聞
樺太新聞
樺太新報
樺太タイムス
樺太中央新聞
樺太中外新聞
樺太日日新聞
樺太報知新聞
樺太北進新聞
樺太毎日新聞
樺太万朝報
樺太民友新聞
花柳粋誌
華麗島
河北省政府公報
眼窩
咸南警友
漢口鄂報
漢口公論日報
漢口国貨日報
漢口新聞報
漢口中西報
漢口導報
漢口日日新聞
漢口日々新聞
皖江日報
漢口白話報
皖光半月刊
皖江晩報
皖声報
関東実業時報
間島新報
間島日報
関東報
広東英文新報（The Canton Daily Sun）
広東新聞
広東晨報
漢文天津日報晩刊
敢報
皖報
皖北時報
皖北日報
橄欖月刊
木浦新報
宜昌公報
宜昌商工日報
宜昌荘報
宜昌星光晩報
義声報
貴族
期待文芸週報
北鮮時事新報
北鮮日日新聞
北鮮日報
北満洲日報
吉林時報
吉林省長官公署公報
吉林日報
戯報
九江時事日報
九江新聞日報
九江晨報
九江日報
九江民国日報
救国日報
救国晩報
求是日報
教育行政週報
教育月刊
教育月報
教育公報
教育雑誌
教育新刊
教育日報
暁鐘
僑星晩報
僑声報
京聞報
鏡報
京報
協和
共和報
極東時報
極東週報
拒毒報
錦県公報
金鋼鑽
銀行週報
錦州新報
錦州新報阜新版
金銅鑽
均報
銀鈴
光州日報
愚公報
草笛
黒龍江省政府公報
群強報
群山日報
グンバオ
荊刺の座
経済月報
経済時報
荊沙国民公報
警察週刊
京城雑筆
京城新聞
京城日日新聞
京城日報
京城のラヂオ
京城物価タイムス
京津日日新聞
警政画刊
荊報
啓明報
経鹿
月刊産業経済
月刊南進
月刊撫順
月刊満洲
月桃
建国月刊
言語と文学
健児
現象報
原生林
建設月刊
建設月報
現代
現代学生
現代日報
公安月刊
公安月報
膠澳日報
黄海潮報
光華日報
光華報
杭県日報
膠済日刊
膠済日報
広州民国日報
紅樹
広州英文日報（The Canton Gazette）
杭州国民新聞
広州市民日報
広州日報
広州平民日報
杭州報
杭州民国日報
公主嶺商報
工商新報
工商日報
工商白話報
工商半月刊
工商報
行人
江西工商報
江声日報
江西民国日報
交通雑誌
孔道報
公道報
膠東卍報
江南正報
杭南日報
抗日週刊
合肥民衆報
公評報
亢報
光明之路
高粱
公論日報
ゴーロス
黒河日報
黒河民報
国語研究会会報
国際協報
国際訳報
国姓爺
国風半月刊
国聞週報
国民外交雑誌
国民公報
国民新聞
国民新報
国民日報
国民晩報
黒龍江司法公報
黒龍江省公署公報
黒龍江民報
呉県市郷公報
呉県晶報
呉県日報
呉県民報
五十会
国貨日報
国華報
国強報
国境毎日新聞
国光日報
湖南工報
湖南国民日報
湖南通俗日報
湖南中山日報
湖南日報
湖南晩報
コペイカ
湖北地方日報
今報
財海
財政公報
済川公報
済南市政月刊
済南市政公報
済南日報
済南晩報
桜草
泊芙藍
ザリヤ
産業と経済
山西政報
山西日報
山西民国日報
山東興信所報
山東商業報
山東省政府公報
山東新報
山東新報青島附録
山東通信
山東日報
山東評論
山東毎日新聞
山東民国日報
三民導報
残夢
三六九小報
詩歌陣
詩火線
事業及経済
自強学校々友会雑誌
時言報
之江日報
市公報
醜草
時事月報
時事新報
実事白話報
敷香時報
市政月刊
市政週刊
市政日刊
四川日報
四川民報
思想と生活
時代公論
時代日報
自治指導部公報
四兆新聞
実業
実業月刊
実業公報
実業時代
実業タイムス
実業之朝鮮
実権日報
実事報
実報
四洮新聞
児童街
支那研究
指南報
詩風帯
持平日報
詩報
時報
司法協会雑誌
司法公報
司法日刊
司法日報
市民日報
市民報
思明報
小小日報
小小報
社会研究
社会公論
社会新聞
社会新報
社会生活
社会日報
蛇木
写生
シャボテン
瓜哇日報
上海公報
上海週報
上海商報
上海時論
シャンハイスカヤ・ザリヤ
上海日日新聞
上海日報
上海半月刊雑誌
上海報
上海毎日新聞
週刊極東
週刊ゴーロス
重慶晩報
修養時報
樹蘭花
朱轓
首都晩報
棕梠竹
旬刊台湾
循環日報
順天時報
湘珂画報
商学日報
消閒日報
消閑報
商業月報
商業雑誌
商業通信
商業日報
湘江晩報
小公報
鐘山日報
湘声晩報
鐘声報
小日報
翔風
晶報
商報
商報晩刊
消防報
商務日報
昭和興信所内報
昭和新報
自布時事
白猫
新快報
新学叢誌
新皖鐸
新漢報
新京
新京経済内報
新京号外
新京商工会議所調査彙報
新京日日新聞
新京日報
新月
人言
真言日報
晨光日報
新光晩報
晨光報
新国民
新国華報
新山東報
新四川日報
新支那
新社会日報
新商報
新蜀報
新新新報
新々日報
新生
晨星（Morning Star）
新青海
新生命
新世界
新泉
新川報
新蘇導報
震旦民報
新竹旬報
新中華
新中華日報
新中華報
新中国報
新中日報
新潮日報
新青島報
新天津報
新天地
泰東興信公所
新南京報
新婦女
新婦女週報
新婦女日報
新福建日報
新聞解放
新文学月報
新聞報
新聞夜報
新聞連合通信
真報
申報
晨報
振報
申報月刊
新北平報
新満公報
新満州
新民衆週刊
新民日報
新民報
晋陽日報
潯陽晩報
瀋陽卍字新聞
新嶺東日報
新嶺東報
綏遠社会日報
綏遠日報
綏遠民国日報
水晶宮
水田と自動車
崇実報
炭の花
スローウオ
清華学報
生活週刊
星華日報
正義時報
正義報
星斯報
盛京時報
政治日報
政治評論
醒時報
西蜀晩報
西鮮日報
成都快報
西南日報
青風報
正風報
正聞報
正報
成報
誠報
西北月刊
生力軍報
セウル・プレス
世界紅卍字新報
世界潮
世界日報
世界晩報
石頭
浙江省政府公報
浙江商報

戦前期「外地」雑誌・新聞総覧

―朝鮮・満洲・台湾の言論界

アジアにおいて
最も急速に産業と文明が発達した日本が、
欧米と対抗しつつどのように
周辺国に影響を及ぼしていったのか？

「外地」に移住した日本人たちは
何を夢見てどう行動したのか？

そして日本人による経済的・政治的
軍事的支配が失敗したとすれば
その原因は何だったのか？

それらを解く鍵がこれらの
雑誌・新聞メディアには示されている。

監　修―井川 充雄
推　薦―土屋 礼子

造　本― A5 判・総約 3,000 頁・上製函
揃　価― 180,000 円（配本毎分売可）

【第一回配本】2016 年 9 月　60,000 円
ISBN978-4-907236-56-4
一巻（346 頁）
　台湾編①
二巻（378 頁）
　台湾編②
三巻（266 頁）
　朝鮮・満洲編①

【第二回配本】2017 年 2 月　60,000 円
ISBN978-4-907236-57-1
四巻（386 頁）
　朝鮮・満洲編②
五巻（430 頁）
　朝鮮・満洲編③
六巻（292 頁）
　朝鮮・満洲編④

【第三回配本】2017 年 9 月　60,000 円
ISBN978-4-907236-58-8
七巻（286 頁）
　朝鮮・満洲編⑤
八巻（340 頁）
　朝鮮・満洲編⑥
九巻（約 300 頁）
　朝鮮・満洲編⑦
　＊「総目次」／「「外地」雑誌・新聞名タイトル索引」

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884　Fax 233-3111
□書店様へ…ありがとうございます
　直接小閣までお申し込みください

図版はすべて本書〔一部加工〕より
価格は税別　047／05／4000

監修者紹介　井川 充雄

1965 年、東京生まれ。1995 年一橋大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程単位修得退学。博士（社会学）。現在、立教大学社会学部教授。
著書に『戦後新興紙と GHQ：新聞用紙をめぐる攻防』（世界思想社、2008 年）、共編著に『原子力と冷戦：日本とアジアの原発導入』（花伝社、2013 年）、解題に『新聞出版用紙割当制度の概要とその業務実績』全二巻（金沢文圃閣、2004 年）、論文に「戦後日本における海外短波放送のリスナー」（『大衆文化』11 号、2014 年 9 月）、「占領期における出版用紙割当制度の変遷」（『日本古書通信』75 巻 2 号、2010 年）などがある。